作品に寄せて

カルメンと私

文・写真／矢崎 彦太郎

久しぶりにオペラ「カルメン」のスコアを開く。ビゼーのオリジナルである台詞によるオペラ・コミック版と、ビゼーの友人だったギローが加筆したレチタティーヴォによるグランド・オペラ版の両方を掲載しているフリッツ・エーザー校訂のスコアは703ページで、ずっしり重い「カルメン」である。半世紀近く使って、ボロボロになったカルムス社のスコアはグランド・オペラ版であるが、オペラ・コミック版が出版される前には広く一般に使われていた。1875年にシューダン社が出版した初版のリプリントと、ビゼー自身の編曲による歌とピアノのヴォーカル・スコアも興味深く、比較参照している。

ビゼー作品の研究に着手したのは、東京藝術大学2年の夏。毎年9月に学生主催で開かれていた芸術祭で、「アルルの女」組曲を学生オーケストラと演奏したが、自然に流れる親しみ易い旋律、多彩な音色、躍動感あふれるリズムに魅了されて、未だ見ぬプロヴァンスの風車やオリーブ繁る林に思いを馳せた。その後、交響曲、組曲「ローマ」、小組曲「子供の遊び」、劇場版「アルルの女」等を演奏した。

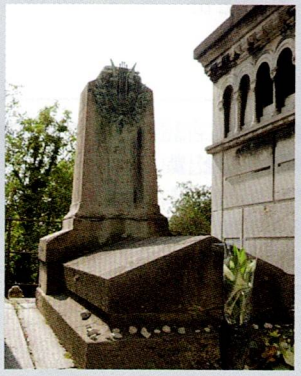
「カルメン」は1979年に、パリ・シャトレ座のコロンヌ管弦楽団定期演奏会で第1組曲を振ったことに始まる。第1と第2組曲の各曲を並べ替えてオペラの筋書きに添った組曲にしたり、カルメン、ドン・ホセ、エスカミーリオ、ミカエラのソロ歌手4人を伴う抜粋演奏会形式版を作成して何度も演奏したが、コンサートの前半にはベートーヴェンの交響曲第5番を置くことが多かった。運命又は宿命のモティーフと呼ばれる音型が執拗に繰り返されて全曲を支配する共通点と、音楽の推進力や音色に関するドイツとフランスの大きな相違点を同時に顕示する面白みがあったからだ。ジャカルタでは物語りの進行を端的に説明するナレーションを入れた。私はインドネシア語を話せないから、英語で原稿を書き、オーケストラ事務局兼合唱指揮者の女性に訳を依頼した。彼女は本来、声楽家でボストンに留学し、ロバート・ショー合唱団で歌っていた。

「カルメン」物語りの時と場所は、1830年頃、スペイン・アンダルシア地方のセヴィリア付近に設定されている。今日の交通事情から想像するのは難しいが、当時は俗に「ピレネーの向こうはアフリカだ」と羨望と侮蔑を込めた眼差しで言われていたらしい。中央部には3000m級の峰が連なるピレネー山脈に対して、イベリア半島南西は狭い部分が僅か14kmのジブラルタル海峡を挟んでアフリカ大陸に接している。しかも、711年にはイスラム教徒が半島に入って西ゴート王国を滅亡させ、1492年のグラナダ陥落によるレコンキスタ(国土回復運動)完了までの約800年間は「コーランか剣か」をモットーに迫るイスラム国であったから印象派の東洋趣味に先駆けた異国趣味に適っていた。南フランスには、イスラム侵入を見張った「火の見櫓」のような塔が、現在も随所に残っている。

プロスペール・メリメ(Prosper Merimée 1803 - 1870) が1830と40年の二度にわたるスペイン旅行の後、オペラの原作である小説「カルメン」を1845年に書き上げたボ・ザール通りのアパルトマン.(10、Rue des Beaux - Arts パリ6区)近くに国立高等美術学校(Ecole nationale supérieure des Beaux - Arts) やドラクロアのアトリエがある。

スペイン系の女子修道会が運営する鎌倉清泉小学校に私は入学した。「頼朝の墓」参道脇にあった我が家の斜向いが学校で、広大な大倉幕府跡に新設されたから、2年の1学期までは藁葺き屋根の日本家屋が教室。校長先生を始め、スペイン人のマドレ(修道女)も数人いらして、皆、日本語に堪能だったが、彼女達の話すスペイン語の語調や、弾いて下さったアルベニス作曲ピアノ曲<イベリア>の響きは懐かしく記憶に残っている。

ビゼーが1869年から1875年にブージヴァル(パリ近郊)で亡くなるまで住んだドゥエ通りのアパルトマン。(22、Rue de Douai パリ9区)「カルメン」だけでなく、「アルルの女」も、この家で作曲された。ビゼーの住居であった事を示すパネルが外壁に取り付けられ、入口ドアの上には、フランス芸術保護建造物と標記されている。「カルメン」の台本作者の一人であるリュドヴィック・アレヴィ(Ludovic Halévy)はビゼーと姻戚関係にあり、同じ建物に住んでいた。



ペール・ラシェーズ墓地(Cimetière du Père-Lachaise パリ20区)の68区画に眠るビゼーの墓。

「カルメン」の初演は、1875年3月3日にパリのオペラ・コミックで行われたが、スノッブなオペラ・ファンには、ジプシーや密輸団が登場して脱獄も話題となり、闘牛と殺人が並行するストーリーは強烈すぎて不評を買い、完全な失敗作と看做された。まったくの偶然だが、4日後の3月7日には、ラヴェルがスペイン国境近くの大西洋に面した港町シブールでバスク系の母から生まれている。失意のビゼーは、初演の3カ月後に心臓麻痺で他界した。享年36歳。

1783年に開場されたオペラ・コミックは1838年に焼失し、同じ場所に再建されて「カルメン」のほか、オッフェンバック「ホフマン物語」、マスネ「マノン」等も初演したが、1887年に5月にトマ「ミニヨン」第1幕上演中に再び出火して多数の死傷者を出す大惨事となった。1898年に再び再建され、シャルパンティエ「ルイーズ」、ドビュッシー「ペレアスとメリザンド」、デュカ「アリアーヌと青髭」等を初演した。従って現存している劇場は「カルメン」を初演した建物ではないし、カルメンとビゼーの執念(日本風に言えば「祟り」)で焼けたのではないかと噂されたから、開館30周年を迎えた素晴らしいホールの三重県総合文化センターに差し障りがあっては記念事業にならないので、あえて写真は撮らなかった。

「カルメン」に限らずオペラを上演する際に私が常に思うのは、客席と舞台の敷居を外し、御来場下さった方々には、繰り広げられる出来事の傍観者ではなく、当事者の一人となっていただきたいということである。この試みが成功するか否かは別として、慣れ親しんだ津の会場でも私のヴィジョンを充分に展開したいと願っている。